

誰もが同じレベルで授業できるように 国の事業を活用してカリキュラムを開発

群馬県

2014年度に県内3地域が文部科学省から「英語教育強化地域拠点事業」に指定された群馬県では、地域バランスを考慮して、県独自でもさらに2地域を拠点地域に指定。県内5つの拠点地域を中心に、小学校向けの独自カリキュラムの開発や教員研修などを、県教育委員会主導で行ってきた。さらに、研究の成果を県内全域に広げるために様々な仕組みを構築し、英語教育の浸透を図っている。

群馬県教育委員会の施策

国の指定に加えて、県独自でも拠点地域を指定し、 県内5地域の研究成果を効果的に県内全域に広げる



教育長 笠原 寛 かさはら・ひろし

北海道大学法学部卒業後、群馬県庁に入職。群馬県病院局長、群馬県企画部長等を経て、2016年度から現職。

群馬県プロフィール

◎関東平野の北西部に位置し、数多くの温泉など豊かな環境に恵まれる。古代には東国文化の中心地として栄え、歴史文化遺産が豊富。2014年には「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録された。

人口 約197万人 面積 6,362km²
 公立学校数 小学校 308校、中学校 161校
 児童生徒数 15万4,005人
 電話 027-226-4521
 URL <http://www.pref.gunma.jp/03/x0110001.html>

取り組みの背景

教員・学校・地域間の 英語教育の差を解消したい

群馬県では、早くから多数の外国人労働者が県内の産業を支え、近年では海外からの観光客が大幅に増加するなど、急速にグローバル化が進んでいる。そうした状況に対応するため、小学校でALTの配置を増やすなど、多くの地域で早い時期から英語教育の充実を図ってきた。笠原寛教育長は次のように述べる。

「県内の小学校には多くのALTが配置され、子どもたちは抵抗なく英語特有の音やリズムに慣れ親しんでいました。一方で、英語指導に不安を感じる教員は多く、授業をALT任せにする傾向が見られるなど、教員・学校・地域間で指導計画や教材の整備状況、指導方法のレベルに差が見られることが課題でした」

そんな中、県内3地域（前橋市、嬬恋村、沼田市）が、2014年度から文部科学省「英語教育強化地域拠点

事業」の指定を受けることとなった。そこで、前述の課題を解決するため、拠点事業を中心に据え、さらに県独自でも地域バランスを考慮して2地域（高崎市、太田市）を指定して研究を進めるとともに、その成果を県内全域に広げるため、県を挙げて様々な取り組みを行うこととした。

実践内容①

拠点事業と連携して 独自カリキュラムを開発

県教委がまず取り組んだのは、独自カリキュラムの開発だ。

「2014年度に、小・中・高の教員6人による専任チームを群馬県総合教育センターに設置しました。そして、どの教員でも同じレベルの授業ができるよう、カリキュラム開発を進めました」（笠原教育長）

低学年は合計10時間分、中・高学年は年間35時間分のカリキュラムを作成し、2015年3月、各校に冊子と音声CDを配布。低学年はあいさ

ご案内

今年度、群馬県内5つの英語教育強化地域の各拠点校では、9～12月にかけて公開授業を実施予定。詳しくは下記へお問い合わせください。
 【お問い合わせ先】群馬県教育委員会義務教育課 担当：大竹（027-226-4615）【ホームページ】http://www.nc.gunma-boe.gsn.ed.jp/?page_id=69

つなど簡単な英語による活動を行い、3年生以降は『Hi, friends!』の内容を基本に、各学年で同じテーマを扱い、徐々にレベルを高めていくスパイラルな学びで構成している。

指導案や活動例を具体化したカリキュラムの特徴は、「音声重視」「相手意識を持たせる」「英語を使う必然性のある場面設定」の3つだ。さらに、ワークシートや絵カード、模擬授業の映像なども用意し、各校が自力で授業ができるようにした(図1)。

「初年度は、指導主事が拠点校を足しげく訪れ、管理職や現場の教員と密に連携して授業づくりを進めました。その過程で挙がった課題や要望をカリキュラムに反映させて、改訂していきました」(笠原教育長)

2016年度には短時間学習用のカリキュラムも作成。さらに今年度は、県のカリキュラムを基にした外国語の授業を経験した中学生が身につけた力を測る評価資料を作成している。

また、県教委は拠点地域における小中高一貫のCAN-DOリストの作成

も支援した。まず、県総合教育センターが素案を作成し、それを基に各拠点校が自校分を作成。校種間でどう接続すればよいかすり合わせて完成させた。沼田市では、教員が常にCAN-DOリストを持ちながら授業を行い、子ども用の振り返りシートも作成して、見通しを持って同じ目線で授業ができるようにしている。このような好事例を他地域にも共有し、全県に広げたいと考えている。

実践内容②

2017年度から県全域に10人のEATを配置

教員の英語指導力向上のため、県総合教育センターでは2015年度から3か年計画で研修を行っている。今年度の小学校英語教育推進教員研修では、県内の全公立小学校から中核となる教員約320人が参加し、3日間の研修を行う。英語教育改革の動向や授業づくりの理論を押さえた後、指導案作成や模擬授業などの演

習に取り組み、さらに拠点校での授業参観や研究会にも参加する予定だ。

また、希望者向けの研修を年2回実施するほか、2017年度までに公立小学校の全教員が拠点校の授業を参観することを目指している。

2017年度からは、指導力の高い教員を英語教育アドバイザー教員(EAT)として県内に10人配置した。

EATは、配置校でモデル授業の実施や指導計画の提案、指導方法の助言をするほか、担当地域内の小学校を訪れ、授業づくりの支援や研修会の講師などを行い、県全域の英語教育の水準を上げる役割を担う。

「EATは、指導主事と教員の中間という位置づけです。学校や地域間で差が生じないように、拠点校以外でも改革を進めたいという知事の強い思いで実現しました」(笠原教育長)

成果・展望

教員の意識が大きく変わり英語に積極的な子どもが増加

近年、子どもたちには英語に対する前向きな姿勢が育っている。拠点校での調査では、「英語の学習が好き」「英語の授業は楽しい」などへの肯定的な回答は6年生で軒並み8割を超え、特に「授業の内容がよくわかる」は約93%が肯定的だった。

また、拠点校以外でも、担任がT1として主体的に授業を行う姿が、特定の教員だけでなく、多くの教員に見られるようになった。

「各校の先生には、子どもの興味・関心を広げられるような授業づくりをお願いします。英語教育の早期化により、早いうちから英語嫌いをつくってしまっては本末転倒ですから。移行期間中も試行錯誤を通じて様々な課題を洗い出し、全面実施に向けてしっかり準備を進めていきたいと思います」(笠原教育長)

図1 「群馬県版英語教育カリキュラム」6年生の指導案とワークシート(例)

The figure shows a lesson plan and a worksheet for a 6th-grade English lesson. The lesson plan includes a unit name 'A day of life', a lesson objective 'What time is it? It's ten.', and a list of activities such as 'Let's Play 1', 'Let's Listen 1', and 'Keyword game'. The worksheet includes a title 'What time is it?', a list of words 'cake, game, name', and a section for 'What time is it?' with a grid for writing answers.

英語専科やEATによる授業づくりや研修を通じて、担任の指導力向上を強力サポート



◎ 1984（昭和59）年開校。地域に開かれた学校づくりに注力し、地域住民や保護者が教育活動支援などを行う「あさひ小学校支援隊」の取り組みが、2013年度に文部科学大臣表彰を受けた。

校長 吉田 誠先生
児童数 582人
学級数 21学級（うち特別支援学級1）
電話 0276-46-3463
URL <http://www.ota.ed.jp/asahi/>

取り組みの背景

県の拠点校として小学校英語の先行実施に取り組む

太田市には工場などに勤務する外国人労働者が多く、その子どもたちが通う太田市立旭小学校では全校児童の1割弱が外国籍だ。廊下や階段には英語やポルトガル語の掲示物があふれ（写真1）、子どもたちも外国語や異文化への関心が高い。

同校は、2014年度から県の英語教育強化地域拠点事業の指定を受け、小学校英語の先行実施に取り組んでいる。授業時数は、低学年は年間10時間、中・高学年は年間35時間としてきたが、2016年度から高学年を教科化し、モジュールの試行を含めて年間約70時間を充てている。

授業づくりのポイント

動きのある活動を取り入れ、子どもの集中力を持続

授業では、県総合教育センターが開発したカリキュラムを活用。英語専科の大槻典子先生はこう語る。

「県のレスンプランを得たことで、先を見通せるようになりました。その上で、子どもの実態を踏まえ、

ALTと相談して内容をアレンジしたり、私が参加した国の中央研修の内容を取り入れたりと、独自に工夫をして授業を組み立てています」

授業の流れは、県のカリキュラムと同じ、「ウォームアップ」（楽しく学習する雰囲気づくり）→「活動」→「音とつづり」（文字認識）→「振り返り」だ。各場面では、子どもの集中力が持続することを特に意識している。

「集中力が途切れると、中学年ではおしゃべりが始まり、高学年では声が出なくなります。そこで歌やチャント、体を動かす活動を随所に取り入れて、内容に変化をつけています。また、教員自身が活動を楽しむことも重要だと考えています」（大槻先生）

例えば、4年生の「国名・国旗当てクイズ」では、各国の特徴を表したジェスチャーを交えてリズムよく



写真1 渡り廊下に英語の掲示物を貼り、「あさひワールドストリート」と命名。ここを通る時は、子どもも教員も、「Hello.」「Hi!」「See you.」など、英語であいさつを交わすのがルールだ。



教諭

大槻典子

おおつき・のりこ

校内研修主任。英語専科。文部科学省の英語教育推進リーダー。中学校での英語指導も経験。



英語・外国語活動指導教員（太田市EAT）

金井律子

かない・りつこ

2016年度の1年間、群馬県総合教育センターで小学校英語のカリキュラム開発チームに所属。

国名を発音したり、エアライティング（空書き）をしたりと、所々に動きを交えることで、子どもは集中力を切らさず活発に動いていた。

高学年ではモジュール学習も取り入れ、県のカリキュラムに沿って進める。45分授業と連動している点特徴だ。英語・外国語活動指導教員（太田市EAT）として同校に配属された金井律子先生はこう説明する。

「高学年の授業を毎週金曜日に行い、その内容の復習や発展的な活動を翌週の月・火・水のモジュール学習で行って、理解が深まるようにしています。モジュールでも機械的な練習はせず、短時間で楽しみながら学べる活動としています」

文字指導

3年生からは、県のカリキュラムに沿ってアルファベットに親しむ活動を徐々に取り入れている。

「3年生ではアルファベットの形を色塗りで認識させ、4年生ではアルファベットのなぞり書き、5・6年生では単語のなぞり書きや写し書きと、楽しみながら気づくような学び

図2 評価に関連した「群馬県版英語教育カリキュラム」のシート例（6年生）



評価では、「群馬県版英語教育カリキュラム」の中にある「E-チャレンジ」や「CAN-DO リスト」（単元の振り返り）を活用。上図左の「E-チャレンジ」は、ALTが起床時刻や就寝時刻などを英語で言うのを聞いて、その時刻を書くというもの。上図右の「CAN-DO リスト-単元のふり返り」では、単元の到達度を自己評価させる。

*群馬県総合教育センター提供資料をそのまま掲載。

を取り入れています」（金井先生）

前述の4年生の国名・国旗当ての授業では、クイズで取り上げたイタリアやインドの「I」の文字について、エアライティングを行った後、プリントの4線上のアルファベットをなぞる活動を行った（写真2）。

評価方法

評価については、授業中の観察に加え、ALTとのやり取りを通して理解度を見る「E-チャレンジ」、単元ごとに自己評価をする「CAN-DO リスト」などを基に行う（図2）。

「県総合教育センターの資料を基に、独自の評価規準を作成していま

す。なるべく子どもに評価と感じさせない内容としています」（大槻先生）

校内外に取り組みを広げる工夫

全員参加のワークショップ型研修で指導力を伸ばす

授業を担当するのは、3年生以上では担任・ALT・専科の3人だ。T1は原則として担任で、授業案や教材などの準備を専科の大槻先生が中心となって進め、授業前に担任、ALTと打ち合わせを行う。モジュールは担任が1人で進めるため、大槻先生と事前に予行演習を行う。

英語が得意でない教員でも安心して指導できるよう、2016年度からは月2回の頻度で校内研修を行い、毎回1～2時間かけて英語力や指導力の向上を図っている。研修には全教員が参加し、歌やチャンツの進め方、クラスルーム・イングリッシュの使い方などを演習形式で学ぶ。

「テーマに沿って、学年ごとのグループで話し合い、全体に発表する

ワークショップを行うなど、先生方がなるべく主体的に取り組めるようにしています」（大槻先生）

また、普段から授業をビデオで撮影して、校内研修の際に好事例を共有することも行っている。

「大切なのは、英語力ではなく、英語を一生懸命話そうとする姿勢です。先生方には間違いを気にせず、簡単な英語をワンフレーズでもよいので使って、子どもと一緒に学びましょうと伝えています」（大槻先生）

また、旭小学校の実践を他校に広める役割を、金井先生が担っている。金井先生は、太田市EATとして、県から派遣されたEATと連携。担当する市内12の小学校を定期的に訪問して、授業づくりのアドバイスを行い、時には実際に授業も行って、各校の教員を支援している。

成果と展望

英語を聞く耳が育ち、教員の指導力も高まる

これまでの実践を通して、大槻先生は、「英語は楽しい」という気持ちを持って中学校に進学する子どもが増えたという手応えを感じている。

「中学校からはよく、『耳が育っている』と言われます。先生が話す英語はほぼ理解しており、自分の考えを表現することにも積極的なようです」

教員の意識も大きく変化した。初めての教員には大槻先生がフォローに入るが、従来からいる教員は抵抗なく英語を話し、ALTをうまく活用しながら積極的に授業をリードできるようになってきた。

「今後は、小中連携やICT環境の整備が進み、恵まれた環境の中で工夫した指導につながればと考えています。同じ中学校区で情報共有を進めて、地域全体の英語力向上を目指していきたいと思います」（大槻先生）



写真2 全身を使ってアルファベットを書くエアライティング。大槻先生が国の中央研修で学んだ手法を授業に取り入れた。